

も自分ができないことについては、見えていました。ITの世界は向いていません。そして札幌を出たくはありませんでした。さらに就職をしない、という選択肢はありません。大学で求人票を見ていたら、北海道銀行のものがありません。一次面接の面接官が小樽商大OBで、話が異常なくらいに盛り上がってしまいます。その方は、あなたは道銀にすごく合っていると思う。上にあげるから、考えてみてください、と言ってくださいました。そして次の日にはもう電話が来て、その後の面接もトントン拍子に進み、私は北海道銀行への就職が決まりました。

私の経験上、物事が良いタイミングで重なるときは、その流れに「Go!」です。逆に、どうも間の悪いことが続くときもあります。きっとそういう場合は、そのまま進んでも良いことはありません。進路で悩むときには、物事のタイミングをよく見定めてください。

こうして私のファーストキャリアは北海道銀行で始まりました。どの支店に配属されるかな、と楽しみに待っていましたが、送られてきた辞令には、「秘書室」とありました。

思わず二度見しました。秘書室ってなにをするの？ 在学中私は秘書の勉強なんてまったくしていません。不安な気持ちのまま、勤務が始まりました。

仕事は、役員フロアの受付カウンターに座って（2名）来客に対応すること。厳しい先輩から、お茶の入れ方から立ち居振る舞いまで実に細かく鍛えられました。

これが1年間続きました。四大卒の他の女性の同期は、ある人は国際部で英語をつかう仕事につき、ある人は企画部で難しいデータを扱っていました。私はただ座ってお客様にっこりしているだけです。何してるんだろう、と悲しくなりました。

2年目になり、さらに私は、なんと頭取秘書になってしまいます。頭取秘書なんて、短大で秘書検定を取った人が、何年も常務や副頭取などの秘書を経験したあとになるものです。ミスがあっては決していけない仕事なんです。でも私は諸先輩を飛び越えて指名されてしまいました。上司になぜ私なのか、と聞くと、「大卒なんだからできるよね」、と言います。四大卒の女子を正式に採用したのは私の期が最初なのでした。その上司はまたあるときに、「今年の7人の大卒女子の中で君がいちばんメンタルが強そうだったから」、とも言いました。仕事に喜びを感じる以前に、毎日プレッシャーと戦っていました。日曜日の夜になると、また一週間が始まるんだと、明け方まで眠れないのです。6時半に鳴る目覚ましでなんとか起きて、7時半に家を出る、という生活がつづきました。

一方でこの時代。私は同期の人と結婚しました。同期はみな仲が良く、スキーなどグループでよく遊んでいました。当時の銀行では、行員同士が結婚した場合、100%女性の方が退職します。私も専業主婦になりました。そして二人の子どもを産みました。

〇人のために全力を尽くす仕事へ

あの厳しい秘書の仕事よりもっと難しかったのが、子育てでした。

そのころの私は、小さな子どもが苦手だったのです。自分の子と他人の子ではもちろん違いますが、はじめのうちはちゃんと抱っこもできませんでした。

子育てはわからないことばかりでした。わからないことは学べば良いのです。どろんこ育児とかモンテッソーリ教育とか、子育ての本をたくさん読みました。シュタイナー教育の通信講座まで受けて、ルソーの「エミール」にも挑戦しました。知識をもとに実践するうちに、こういう子に育てほしい、という軸がだんだんできてきます。それがあるとブレなくなります。私は二人の子を育てましたが、7歳ころまでがほんとうに大変でした。こんなに大変な子育てでしたが、いまの自分があるのは、子どもたちがいたからなのです。

結婚で終わった、ビジネスの世界での私のファーストキャリアですが、次に、人生最大のショックな出来事が、私のセカンドキャリアを開くこととなります。自分では想像もしていなかったその出来事は、離婚でした。辛くて悲しくて、3年くらいは心から笑えないような日々が続きました。でも行動しなければ二人の子を育てていけません。

また眠れないほど不安な日々が続きましたが、ほどなく私は、「キャリアカウンセラー」の資格をとって、その仕事をしようと決めました。

キャリアカウンセラーとは、90年代にアメリカから入ってきたものです。それまで転職も稀な日本の企業社会では、社員のキャリアを作ってきたのは会社の人事部でした。しかし転職が珍しくなくなり人材の流動化が進んでいくなかで、日本でももっと主体的に自らキャリアを開拓していこうという動きが出てきます。そうすると、専門家の知見やアドバイスが必要です。その専門家がキャリアカウンセラーで、日本でもこの専門家を育てるための政策がとられるようになりました。私は通信講座でキャリアカウンセラーの資格を取りました。

資格をとっても、当時はまだ就職先はあまりありません。そんなとき、就職氷河期で正社員になれない若者たちが増えたことを受けて、国と道が新しい就職支援制度をスタートさせたのです。拠点は全国に7カ所。北海道では札幌にジョブカフェ北海道（北海道若年者就職支援センター）が設けられました。就職活動をしている方を対象に就職相談やセミナー、求人情報検索などのサービスが無料で受けられる施設です。私はこの運営を請け負うキャリアバンク（株）に入社して、カウンセリングの仕事に就くことができました。2004年のことです。

就職先を見つけるお手伝いは、文字通り人のために尽くす仕事で、私は無我夢中で働きました。一人50分のカウンセリングを、1日6、7人。家に帰るころは疲労困憊です。リビングで服を着たまま寝落ちするようなことも珍しくありませんでした。3年間で1500人くらいの方の相談に応えたこととなります。ハードでしたが、人のために一生懸命仕事をするには、とてもやりがいを感じました。自分だけのためならこんなに頑張れなかったと思います。道銀時代に比べて、私のキャリアステージはこの時代にひとつ上がったと思います。

この就活を総括すれば、「やりたいという情熱」と「適性」があれば、人は、難しいと思われた距離も超えていける、ということになります。どちらかひとつではダメです。「情熱」と「適性」。このふたつのかけ算が成立すれば、希望はきっとかないます。

○思いがけず短大の講師に

そんな激務の中で、小樽商大出身の女性の上司が、思いがけないチャンスを私の前に示してくれました。札幌大学が講師の人材を求めているのだけれど、これはあなたにピッタリではないか、というのです。求められている条件は、「秘書経験があること」「授業ができること」「学生のサポートができること」。

なるほどたしかに私にぴったりでした（笑）。実際に秘書経験があること。これがとくに重要だと感じました。道銀で、あれほど面食らって苦しんでいた秘書の仕事が、20年の歳月をめぐって、私の強みになったのです。あの苦労は、このためだったんだ。20年かけて私は答え合わせをしたように思いました。

次の日、私は札幌大学に応募することを決意しました。こうして私は、札幌大学女子短期大学部で特別任用教員になりました。

ただこの時点で、リスクがありました。任用期間が5年に限られていたのです。大学教員になっても、5年後にはまた一から仕事を探さなければならない。思うような仕事があるだろうか…。でも、人のために役に立ち、短大生たちとの時間は楽しいだろうな、と思いました。そして私はリスクを取りました。授業に、就職支援に、こちらでも夢中で働く中で、5年の任期は延長されて、合わせて9年間札幌大学で働くことができました。

といっても大学で教えるのは初めてですから、授業の用意や私自身の新たな学びに、また無我夢中で取り組みました。子どもたちには寂しい思いをさせたしまった、という深い反省もあります。

今度の就活を総括すれば、「いま挑戦したいこと」があれば、「いま」やるべきだ、ということ。5年先に社会や自分の環境がどうなっているかなんて、どの道わからないのです。状況は刻々と変化するのですから。それならばまず自分が飛び込んでいって、自分の手で状況を変えていくしかないと思います。

○偶然の出来事を、キャリア形成にどう繋げるか

札幌大学女子短期大学部で教えているうちに、娘の大学受験が近づいてきました。長男はすでに札幌で大学生になっていましたが、娘が安心して進学するためには、私の収入をアップさせなければなりません（奨学金を使わず、ふたりの学費は私が出そうと決めていました）。そこで、全国の大学でビジネス実務や就職支援部門の教員の募集を探してみました。任期付きの採用ではない募集です。そして縁があって、いまの兵庫大学に新たなポストを見つけました。2016年のこと。私は50歳になっていました。

自分が関西で暮らすなんて、まったく思いがけないことでした。道外で暮らしたことのない私にとって、関西はとても温暖で暮らしやすいところです。なんとといっても、四季を通して夏靴だけで済んでしまうのですから。神戸は想像していたとおり、ロマンチックですてきなまちです。

さて、ここまで私のキャリアを棚卸ししてみました。最初に言ったように、これは後輩の皆さんへの一度きりの講義なので、すべてをお話ししました。ここまでの話を、まとめて考察してみましょう。

●自分の願ったとおりの結果じゃなくても、受けれて頑張ってみること（私の秘書時代）。

すると、思いがけない展開で、願っていたより素晴らしい場所にたどり着ける可能性があります。ことわざで言えば、禍福はつねに変転していくという、「人間万事塞翁が馬」です。

●最大の危機こそ、最大のチャンス！（離婚からキャリアカウンセラーへ）

立ち直れないと思うほどの危機を乗り越えたとき、人生のステージはきっと上がっています。

皆さんがいま想像することは難しいでしょうけれど、一般に「ミドルエイジ・クライシス（中年の危機）」という言葉があります。40代くらいで、人生観を覆すような出来事が起こるというものです。私の場合はそれが離婚でした。子どもたちと自活していくために、私は不必要なプライドをみんな捨てました。そうしなければ生きていけなかったからです。でもそのことで、私はのびのびと自分らしくなれたと思います。「幸福は不幸の顔をしてやってくる」、なんていう言葉のとおりです。

●これからの時代にキャリアを発展させるには、「目標を立てて計画的に行動する」ことと、

「偶然の出来事を受け入れてチャンスに変える」こと、このふたつを組み合わせることを、皆さんに提案します。

目標と計画は、従来からあるキャリア形成の軸です。でも現代のように何があるかわからないような変化が激しい時代には、目標に向かって進みながらも、思いがけないチャンスや出来事とも遭遇するでしょう。そのときは思い切って横っ飛びして、そのチャンスをつかむこと。強調したいのはそのことです。

私の場合、商大を卒業して道銀で秘書になり、辞めたあとでキャリアカウンセラーの資格を取ったことが、思いがけず短大の教員の職を招き寄せました。兵庫大学に移ったのも思いがけない縁だと言えます。

偶発性とキャリア形成の関係を探究した、「ブランド・ハップンスタンス（Planned Happenstance）」という理論があります。スタンフォード大学のジョン・D・克蘭ボルツ教授が提唱した、日本語でいうと「計画された偶発性理論」です。

克蘭ボルツ教授は、多くのケーススタディから、変化の激しい現代において、キャリアの多くは偶然の出来事によって形成されることを指摘します。ですからこそ、偶然の出来事を利用して、キャリア形成に役立てることができるのです。さらにはもっと前のめりに、思いがけない出来事を自分で引き寄せるために働きかけて、キャリア形成のチャンスを自分で作り出そう、と呼びかけています。

教授は、偶然をチャンスに変える際に大切なこととして、次の5つを上げます。

1. 好奇心 2. 柔軟性 3. 持続性 4. 楽観性 5. リスクを取る

突然目の前にチャンスが現れたら、この5つの指針に沿って行動するのが良い、という主旨です。まず好奇心を高めて、杓子定規に考えず（柔軟性）、積み重ねることができるような行動をして（持続性）、不安は意識せず（楽観性）、ここぞというときはリスクも果敢に取る。

いま思うと、短大の教員になるチャンスが突然現れたとき、私の決断にはこの5つの要素が深く関わっていました。まずは何より、やってみたい！という「好奇心」。そして学生たちと過ごし、彼らを支援していくこ

とには、「柔軟性」や「持続性」が重要です。5年の任期に対しては、「楽観」的に考えて「リスクを取る」。そうして私はキャリアカウンセラーから短大の教員になったのでした。

○「天からの封書」に気づく日が来る

最後に皆さんに、森信三先生（哲学者・教育者 1896-1992）の言葉を贈ります。

「私たちはみな、『天からの封書』をいただいて、この世に生まれてくる。そこには、それぞれ自分がこの世に派遣させられた使命が書かれている。少なくとも40歳までに、天から授けられた封書を自ら開封し、しっかり読み取らなくてはならない。与えられた使命を読み取るか否かで、その後の人生の生き方に雲泥の差が生ずることは、いうまでもない」

森信三先生には、短大の教員になったときに読んだ本「修身教授録」で出会いました。とても共感することが多くて、その後ほかにたくさんある著作も読み進めました。

「自分がこの世に派遣させられた使命」とは何でしょう。難しいですね。多くの人にとってそれは、スキルとキャリアを磨きながら仕事を通して担うものではないでしょうか。自分の力や言葉で考え続けることでしか、それはわからないと思います。

神戸に暮らして若い人たちにビジネス実務などを教えているいまの私の仕事は、私の資質や志向、そしてそれまでのキャリアがすべてうまく統合されているんだと思います。その意味でいまの私は、「天からの封書」に気づいて、これを開けることができたのかな、と思っています。

先生は最後にこの一節を置いています。「思えばなんと天の封書を読まずに人生を終わる人の多きことよ」。

自分が何のために生まれて、何のために仕事をして、生きているのか。そのことを深く考えもせず、知ろうともせず、封書が来ていることに気づかずに一生を終える人の方が、実は多い。先生はそう言うのです。

どんな人にも人生は一度きりです。だから皆さん、いまがチャンスだというときがいつか来たら、どうぞチャレンジしてください。チャレンジする人、しない人がいます。でもチャレンジしたことの後悔よりも、チャレンジしなかったことの後悔の方が、きっとずっと大きいはずですよ。

◎野際 斉 氏（昭和 63 年卒／北洋銀行）

「地域金融機関の実態とこれからの役割」

○1988（昭和 63）年、北海道拓殖銀行に入行

北海道拓殖銀行（拓銀）へはこの年、商大から12名が入行しています。本州にもたくさん支店があったので、ずっと実家暮らしだった私は、家を出て本州で働きたいという希望を持っていました。それも拓銀を志望した理由のひとつです。

入行すると希望通り本州で、東京の調布市にあったつつじヶ丘支店に配属されました。そこに3年いて、28歳のときには、拓銀と道庁の交流人事で、道庁の企画政策のセクションに2年間出向したこともありました。

皆さんご存知だと思いますが、拓銀は1997年の11月に破綻しました。その前後のことはのちほど触れますが、そこで全行員はいわばクビになり、私は縁があって北洋銀行に入行しました。2018年には常務執行役員になり、現在はその立場で監査部長を務めています。

○バブル経済とは何だったのか

私が拓銀に入行した時代、日本の主要銀行は22行とされていました。そのうち拓銀を含む都市銀行は13行。これが今では、大手5行などといわれるまでに淘汰・統合されました。「三菱UFJフィナンシャル・グループ（FG）」、「三井住友FG」、「みずほFG」。そして、「三井住友トラスト・ホールディングス（HD）」、「りそなHD」

です。

国内主要銀行の統合再編（金融再編）のチャートを見ていただきますが、ご覧のように2000年以降劇的な変化の大波に洗われていることがわかります。なぜこうなったのか。それは、いわゆるバブル経済が崩壊して、不良債権が膨らんだ金融機関の経営が行き詰まったことが原因です。預金者らに大きな混乱をもたらす破綻を避けるために経営統合が進み、その動きが銀行の再編を加速したのです。

こうした日本経済全体の動向の背景を、内閣府や日銀、総務省などが公開しているデータのグラフで見てください。まず「GDP（国内総生産）の推移」から。

1956年～73年までは、年平均なんとプラス9.1%の成長。いわゆる高度成長です。73年に第一次オイルショックがあり、一気にマイナスになりますが、（1979年に第二次オイルショックがあったものの）70年代後半からは持ち直して、安定成長がつづきました。74年～90年までの年平均成長率は4.2%。80年代は日本経済は好調でした。しかしバブル経済がはじけた92年以降、マイナス成長の年が断続的に見て取れます。

さてバブル経済とは何でしょう？

これは、1985年のプラザ合意（ドル高による貿易赤字に苦しむ米国のためにドル安に向けた先進5カ国の協調介入への合意）によって急激な円高が起こったことが始まりです。円高による不況が起こったために、日銀は公定歩合を引き下げます。つまり企業が資金調達をしやすい状態になったので、融資の資金が社会に行き渡ります。そして土地や株式の購入に大量に流れ、地価や株価の高騰を招きました。これがバブル景気です。

このころは土地税制に課題があり、また証券会社は、利回りを保証したいいわゆる営業特金という仕組みで、大口顧客に対して損失を補填していました。ですから不動産取引や株式市場にどんどん資金が流れ、過熱していきます。一方で物価の上昇は低く、賃金も同様です。資産だけがインフレ状態でした。

こうした事態に対して大蔵省（現・金融庁）は、金融機関の不動産融資について規制を始めました。証券会社の損失補填も禁じられます。さらには、日銀が公定歩合を急激に上げました。

こうした政策は、加熱した経済を着実に静めるものではなく、一気に破壊するものでした。こうして日本経済は、失われた〇〇年と言われる停滞期に落ち込んでいきました。

2000年前後にアメリカは情報技術関連への過剰な投資がバブル状態（ITバブル）となりますが、このときアメリカ政府の政策は、バブル経済を乱暴に破壊してしまった日本のそれを反面教師としたものであったことが知られています。

「バブルの中にいる人間には、それはバブル（はかないいつときの夢物語）だとわからなかったんだ」などという話は、事実ではありません。私のお客さまたちも、「こんなに土地の値が上がるのはおかしい」、「株価がいつ暴落するのか恐ろしくてしょうがない」、などと言っていました。私の上司は、大蔵省が金融機関に土地の総量規制を通達した時点（1990年春）ですでに、この景気は終わる、と断言していました。

〇デフレの脱却とコロナ禍

さて次は「外国為替相場（米ドル／円）の推移」のグラフを見ていただきます。

私が入行した1988（昭和63）年は、先にふれた、1985年から始まった円高不況。企業倒産も少なくありませんでした。1994年の年末までは円高基調が続きます。そのため、日本のモノづくり産業は、生産拠点を海外に移していきました。そのあとは、アメリカのドル高政策もあり円安に向かいます。

しかしリーマンショック後の金融政策によって、再び、今度は1ドル80円を割り込むような、極端な円高の流れとなります。それがようやく、2013年ころから円安の基調が進展するのは、いわゆるアベノミクスと呼ばれる政策によるものです。

プラザ合意があった1985年の秋には1ドル210円くらいの円安水準で、リーマンショック（2008年秋）と東日本大震災（2011年3月）を経た時点では75円台にまで円高が進んだわけですが、私は、日本経済にとっては1ドル110円くらいがちょうど心地の良いラインではないか、と考えています。

「物価・サービス価格」、2020年の値を100とする消費者物価指数（消費財の価格の変動）のグラフを見て